



コロナ禍でもできる「感情的な距離」を近づけるポイント

近畿大学総合社会学部 准教授 岡本 健

新型コロナで開いた「物理的距離」

2020年は、新型コロナウイルスとの戦いで幕を開けることとなった。2019年11月に初めて中国で確認された新たなウイルス性肺炎は、その後、世界中に拡がり、観光をはじめとしたさまざまな産業、文化、社会に大きな変更を迫った。「密閉」、「密集」、「密接」の三密回避が合言葉になり、人と人の距離をあける「ソーシャルディスタンス」が励行された。

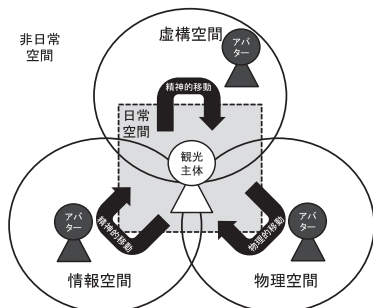
普段は学生たちの活気であふれる大学に、学生の姿はなく、遠隔授業が実施された。パソコンやスマホ、タブレット端末などを通しての授業やコミュニケーションが主になり、画面で隔てられた「向こう側」にいる人間との間接的なやりとりに終始した。このような変化がこの一年の間、社会の随所で見られたのである。イベントや祭りはほぼ全て中止。中でも「人の移動」や「体験」が価値を持つ「観光」は大打撃を受けたのである。

「物理空間」「情報空間」「虚構空間」

近年、世界中で人々の移動が盛んになっていた。そうした中で、日本はインバウンドの振興を行ってきた。しかし、今回の新型コロナウイルスは、その盛んになった人々の移動によって世界中に拡がることとなった。人間はウイルスを運ぶメディアとなってしまったのである。

一方、スマートフォンなどのメディアを通じて人々が

接続できる空間も2000年代を通じて広大になった。我々の身体が存在する空間を「物理空間」とするならば、インターネットは「情報空間」と表現できよう。



「物理」、「情報」、「虚構」3つの空間の移動

そして、物語で描かれる世界は「虚構空間」ということができる。緊急事態宣言が出され「外出自粛」が叫ばれて、物理空間上を人々が移動したり、物理空間で集まったりすることが阻害された時に起こったことは、「情報空間」や「虚構空間」への精神的移動であった。それを示すのが、NetflixやAmazonプライムといった「サブスクリプションサービス」や、ゲーム産業の活況である。

工夫で近づける「精神的距離」

現代の観光は、物理空間を身体が移動することだけでは捉えきれない。物理的な空間を移動する際には「虚構空間」を通じて醸成された「愛着」や「好奇心」などが動機となり、「情報空間」からの「情報」を元に行く。物理空間における身体的移動が極端に制限された時にできることは、「情報空間」や「虚構空間」への精神的移動である。令和元年に起こった「京都アニメーション放火殺人事件」は記憶に新しいだろう。事件後、世界各国のクリエイターや影響の大きな人物から京都アニメーションに対して寄付が集まった。なぜか。京都アニメーションが生み出してきたアニメが、多くの人に「愛されていた」からである。そして、その愛されるアニメを作った人々への「リスペクト」が醸成されていたからだ。「精神的距離」が近づけば、その対象の「情報」にアクセスしなくなり、応援しなくなり、「物理」的に接近しなくなる。今、必要なことは「愛される場所」になることなのだ。

プロフィール

岡本 健 (おかもと たけし)
近畿大学 総合社会学部 総合社会学科 社会・マスメディア系専攻 准教授。博士 (観光学)。コンテンツツーリズムやゾンビについて研究。著書に『巡礼ビジネス』(KADOKAWA)、『大学で学ぶゾンビ学』(扶桑社) などがある。